



# 家族、恋愛、子育て、ビジネス、どんな人間関係にも活かせる

## ■人を前向きにして自分も元気をもらえる

駒野あゆみさんは、スタッフをしている富山市内の助産院で、『ママなび講座』を7年間、毎月開催している。個々のママの「上の子の扱い方がわからない」「兄弟なのに全然違う」といった悩みにも、性格統計学をもとにカウンセリングをする。スッキリした顔で「早速実践してみます!」と帰っていくママの姿を見ると、むしろ自分が元気をもらっていることを実感するという。

他にも、少人数のセミナーからPTAの父兄や生徒向けの講演、高校の教職員への講座、60歳以上のシニアアカレτζジの講師など、様々な人達に生き方やコミュニケーションのヒントを伝えている。

「家庭では、子どもたちへの声かけですね。我が家の長男と次男は違うタイプで、やる気になる声かけや響く褒め言葉、タブーも違います。それぞれに伝わる声かけをしています。今年24歳の長男と18歳の次男とは、周りからも『ほんとに仲良しだよ。うちも息子とそんな関係になりたいわ』などとよく言われる仲です」

## ■性格統計学で人それぞれの本質を読み取り導く

性格統計学とは、(一社)日本ライフコミュニケーション協会の代表理事を務める稲場真由美さんが、16年をかけて、のべ12万人のデータを解析し体系化した「人の性格の違い」に着目したコミュニケーションメソッド。カウンセリングは、専用診断ソフトを使い、人それぞれの価値観や性格の違いによるコミュニケーションのずれや誤解の原因を見出し、具体的な問題解決に導く手法だ。協会では、心理統計シ

心理統計シニアライフカウンセラー  
性格統計ライフコミュニケーション講師

## 駒野あゆみさん

もともと深く悩むタイプではなかったが、性格統計学を学んだことで、自分と相手との違いを認めることができるようになり、明らかにストレスが軽減した。周りからは「いつもおおらかなだね」「怒ることあるの?」と羨ましがられるようだ。



ニアライフカウンセラーの他にも、子育て・人間関係・ビジネスなど、様々な活用シーンを想定した講座を主に東京と富山で開催し、資格を認定している。駒野さんは、講師資格取得後も学びを継続。現在「伝え方コミュニケーション検定」の講師も務め、スキルを家庭や社会で役立てている一人である。

## ■きっかけは長男の不登校を解決したくて

「私がこの資格を知ったのは、長男が高校1年生の時でした。進学校で毎日課題に追われていたある日、高校へ行かなくなったのです。しばらく休んで

も全く活力の出ない様子を見ていて、母親として真剣に悩みました。良いと言われることは何でもしたと思います。東京の支援センターにも通いました。そんな中、友人の紹介で出会ったのが性格統計学で、長男も私もそれぞれがカウンセリングを受けました。まず「自分と相手を知る」ことから始まり、お互いの価値観の違いがわかりました。私が良かれと思っかけていた言葉の数々が、長男には逆にやる気を失くす言葉だったのです。これはもう自分が学んで、子どもたちに合った関わり方をするしかない、すぐに学びながら実践を始めました」

おかげで長男は無事卒業、大学を経て富山で就職し、家族仲良く充実した毎日を送っている。

## ■一生の仕事として携われるのも魅力

「学び始めてからカウンセラー資格取得まで約1年、コミュニケーション講師資格取得までは、約1年半かかりました。私は家でひとりで勉強できるタイプではなかったので、参加型講座を受講することで勉強を進めました。学んでみて感じたのが、『もっと早く知っていたかった』ということなんです。

この資格の最大の魅力は、コミュニケーション全ての場面で活用できること。そして、歳を重ねても一生の仕事として携われることです。自分の知識と自分の言葉で、目の前の相手を元気にすることができ、カウンセラーの仕事は、とてもやりがいがあり、何よりも人を元気にすることで自分がいっばん元気をもらえる仕事です。家族、恋愛、子育て、ビジネス、どんな人間関係にも活かせる、言わば『ゆりかごから墓場まで』ですね(笑)」

●資格の認定元

一般社団法人 日本ライフコミュニケーション協会 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-21-1321 Mail: home@j-lca.org http://j-lca.com/

コツコツと何か作っているのが楽しくてしょうがない



## 日本刺繍と仕覆 竹花万貴

Takehana Maki

1968年 代々木デザイナー学院 ジュエリーデザイン研究科卒業  
1980年 銀座ギャラリーにて個展「骨董ジュエリーの試み」  
1982年 銀座松屋にて個展「骨董ジュエリーの試みⅡ」  
1988年 ギャラリー三幸にて個展「印象・能」  
2001年 第30回伝統工芸日本金工展初入選「つばめ」「かたつむり」  
2003年 第49回日本伝統工芸展初入選「かまきり」  
2007年 個展「彫金帯留・わが身より あこがれいずる」銀座ミキモト  
2008年 第37回伝統工芸 日本金工展「蟹」日本工芸会賞受賞  
2013年 個展「ジャポニズムに想う - 彫金帯留」銀座ミキモト  
2014年 第43回伝統工芸日本金工展「ざくろ」宗桂会賞受賞  
2015年 第44回伝統工芸日本金工展「朝顔」東京都教育委員会賞受賞  
他数多くの入選をはたす。現在 日本工芸会正会員

前編では、竹花万貴氏の帯留を彫金としての魅力に焦点を当てて紹介した。帯留は、帯とともに、着物とともに、一体となつて物語を紡ぎ、さらには纏う人の世界観を表すもの。竹花氏は、もうひとつの技である日本刺繍を用いて、古い帯や着物に命を吹き込む。さらには更紗や能衣装裂など和洋の古布を仕覆として生かす。その感性と造形に触れながら、和装の楽しみ方の一端を学ばせていただいた。

——私が着させていただいたのは、「草がくれ」の着物・帯・帯留。前編でも紹介したものです。

そうですね。虫の行列が月に向かって貢物を運んでいく秋の豊穡祭のイメージ。途中すすき(帯)の中にかまきり(帯留)が隠れている様子です。

私が着ているのは、なでしこ虫籠を刺繍してあります。帯留は、作品集では蝶をコーディネートしていますが、今日はより秋らしくキリギリスです。

佐藤さんが着ているのは、とんぼの絵柄の着物に、帯はぶどう柄、帯留はりすです。不思議な取り合わせに思ふかもしれません。ぶどうは武道に通じるとして、「武道を律す」という語呂で、昔から武人に好まれた図柄なんです。蒔絵や彫り物にもよく登場します。

——着物や帯はアンティークを用いられていますが、入手されるのは大変ではないですか。

もともと骨董が好きだったこともあり、以前はよく旅行先で骨董店を覗いて探したりしていました。でも、結局良いものは京都や東京の骨董店に集まってくるので

左から財団・佐藤梨奈、竹花万貴氏、上野由美子氏

聞き手：上野由美子(右)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年～2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

帯留  
かまきり(2003年)



帯  
なでしこ虫籠図  
細名古屋帯(昭和)  
竹花万貴(2007年)



帯留  
碧玉小りす  
ぶどう図縞袋帯(昭和)  
(2006年)



す。あとでご紹介する仕覆に用いる布もそうですが、好きな布に出会おうと買い置きしておきます。夜な夜な布を見ながら、ここに何を刺繍してとか、この柄をどう見せてとか、妄想というか私なりの物語を創造して楽しんでます。

——自分一人で絵柄を考えて、刺繍をして、彫金もしてというのは大変だと思うのですが。

帯にひと針ひと針縫っていく刺繍も、彫金でコツコツと帯留を作るのも、たんたんと一人で何か作っているのが楽しくてしょうがなく、気がついたら夜が更けていることもよくあります。

最近、特に季節感を意識して作っています。一幅の画のような帯が理想です。雪の結晶を刺繍した着物、それに合わせた帯。深々と降り積もる雪の中に佇む一羽の白鷺図が、先日完成しました。できたばかりで写真撮影をしておらず、ここに紹介できなくて残念です。

——それでは着物を着たところで、仕覆を見せていただきます。どれも皆かわいいですね！

うれしいです。お道具や更紗・能衣装裂などの産まれた場所や時代、布地の柄などからドラマを創造しながら、この子にどんな服を着せてあげようかという感じで、トータルコーディネートするのが面白いのです。最近、「自分のお道具用に作りたいので教えてほしい」という人もいるんですよ。仕覆は縫うところは少ないですから、手順とコツを学べば、あとはセンスだと思います。

ただ、きちんとした物を作るのは大変です。まず採寸をして、和紙で底と本体の型紙を作る。底は、表裏ともに何枚かの和紙を貼り、それぞれの布を貼る。裏布で仮縫いし、次に表を縫う。表と裏の底同士を貼り、合体する。表の内側に綿を入れる。つがり糸を撚り、組み紐で緒を作るなど、地味な作業の結果です。

——刺繍と仕覆はどちらで習われたのですか。



帯 暈し織地(昭和)  
刺繍 歳冬(2012年)



帯 紬地(昭和)  
刺繍 旅立ち(2010年)



帯 紬地(昭和・亡き母親の着物)  
刺繍 秋の実り(2012年)



ジャポニズムシリーズの仕覆3点。  
布地は、(上)19世紀イラン、(左上)19世紀インド、(左下)19世紀フランスのもの。  
仕覆に包まれているのは、エミール・ガレ、ルネ・ラリックなどのガラス器。

刺繍はいつか習いたいと思いつながら、なかなか出会いがありませんでした。区報で知った「職人が教える日本刺繍」という講座を体験したところ、先生の技術の素晴らしさに「やっと出会った！」と感じ、即入門しました。10年以上、今も習っています。

仕覆は何年か教室に通い、最終的に職人の先生に行き着きました。残念ながら仕覆の先生は亡くなられ、今は思い出しながら自習しています。

——彫金帯留のご指導はされないのですか。  
スペースの問題、ガスバーナーやその他設備の問題、道具の塹たがを自作するところからしなければならぬので、現状では難しいと思います。

祝

2016年12月 大分大学博士号(工学)取得

## 原田浩司さん(取得時57歳)

【論文テーマ】低輻射加熱を受ける木材の燃焼性能および高温域に晒された木材の強度性能に関する研究

## 木造建築の発展と国産材活用のネットワークを打破するための研究と提言

## ■建てる側と使う側の評価のギャップに愕然

30年ほど前、ゼネコンの社員だった原田浩司さん。「著名な建築家の設計による、当時、まだ珍しかったコンクリート打ちっぱなしの大学の校舎建築を担当しました。技術的にも難しい課題をクリアし、建築業界では高い評価を受けたのです。ですが、耳に入ってくる女子大生たちの評判は芳しいものとは言えず、造る側と使う側のギャップに愕然としました。それを機に、コンクリートの建物はもういいと感じ、故郷の山口県に戻りました。社員10人ほどの木造軸組構法の工務店で、そこは製材所も兼ねていて、大工さんたちに教わりながら木造のこと・木材のことを勉強していきました」

そのころ、建築雑誌で木造3階建てが紹介され、ラジオでは出雲ドームという木造の屋根付球場の計画が発表されていた。ちょうど一級建築士を取得し、住宅以外の木造建築にも興味を抱いていた原田さんは、木造建築が転換期にあることを予感した。木造建築の構造設計ができる人がほとんどいなかったのだから、そこから勉強しようかと再度上京。木造3階建てや、集材材を使った建築物の構造設計に取り組んだ。

## ■斬新な設計法普及のカギはマニュアル化

スポーツ施設等の木造化において、耐火性能検証法は有効な設計手法だが、設計作業に時間がかかるうえ、木材と火災工学に精通した人材は、今でも日本に数名しかいない。しかも皆、東京のゼネコンや大手コンサルの所属だ。人材不足で大型木造建築が普及しない状況を変えたいと、原田さんは本研究を

始めた。耐火性能検証法の手順や計算式を、火災工学の専門家でない一級建築士でも使えるようマニュアル化することができれば、木造建築の普及や国産材の活用が進む。火災工学の第一人者である早稲田大学の長谷見雄二教授から様々なことを学び、マニュアル化の前段として、木材はどういう条件で燃えるのか、温度が高くなった木材の強度がどう変化するかを、数値化する必要性を感じた。

木材が燃焼することを前提とした実験は過去に多数あるが、木材が着火するかどうかの限界付近の条件での実験は、海外も含めほぼなかったため、低輻射加熱による燃焼実験を始めた。10センチ角のスギ板に20分から30分間、熱をかけて、どの程度の熱で板が燃えるか。また20分間で燃えてしまった木材は加熱終了後、燃焼が止まるのか、その時の炭化深さ

は。さらに、強度はどうか変化するか荷重実験をした。結果、木の表面の色は変化がなくても、150℃を超えた熱を加えると強度性能が落ちることが見えた。論文では、加熱実験結果と、蓄積した木材の知識を踏まえ、耐火性能検証法による木材の検討は、こう設計すべきという提言をしている。

## ■公共建築物の木材利用促進にも寄与

「平成22年に公共建築物の木材の利用促進に関する法律ができ、大型のスポーツ施設や学校の体育館の木造化も増えてはいますが、設計にかかる時間や煩雑な手続き、技術者不足がネックとなり、地方の設計者には耐火性能検証法を使った木造化は、まだ難しい技術なんです。提言を活かしたマニュアル化が実現すれば、設計や審査をする時間が短縮されます。また、体育館などでは、燃えた際に柱の表面が炭化して断熱層の役割を果たすことを見込んだ、燃え代設計が使われますが、燃えないことも前提にできる耐火性能検証法が使えれば、柱を細くし、接合部もすっきりさせ、コストダウンできます。

学位を目指す宣言をしたのは、自分に発破をかけるためでしたが、おかげで多くの人に応援してもらえました。大分大学の井上先生、田中先生、九州大学の藤本先生、秋田県立大学、熊本県の試験場では実験装置を借らせてくださいました。材料は所属の山佐木材や秋田の木材業者から提供してもらいました。全国に行ったので交通費はかなりかかりましたが、それと授業料以外は、木材・林業関係のみさんがご協力くださいました」



自治体などから地元木材の普及促進のアドバイスを求められ、現在も全国を飛び回ることが多いという原田さん。